加藤清遺稿　蔵文和譯『世間施設』(5)

福　田　　琢（編）

編者ノート

前号に引き続き、本学園図書館所蔵『世間施設』和訳ノートを紹介する。『世間施設』(*Lokaprajñapti*) は、初期インド仏教の神話的世界観・宇宙論を叙述した、一種の仏教博物誌とも言うべき文献である。インド原典は断片的にしか発見されておらず、全9巻から成るチベット語訳のみが完本として現存する。ここに紹介するのはそのチベット訳からの和訳で、戦前の短い期間に研究者として活動した故・加藤清（かとう・せい、1907－1956）氏の業績である。氏の没後、遺族によって本学園図書館に寄贈されたまま埋れていたこの資料を数年前に見いだした筆者は、以後整理作業を進め、すでに第1巻・第2巻を『同朋佛教』第34号（1999年）に、第3巻を『同朋佛教』第35号（1999年）に、第4巻・第5巻を『同朋佛教』第36号（2000年）に、第6巻を『同朋大学論叢』第84号（2001年）に発表した。

今回掲載分は第7巻および第8巻の前半3分の1ほどであり、章でいえば全14章のうち第11章の後半、第12章の全文、および第13章の全文に相当する。内容は以下の如し。

【第 11 章／承前】前巻所収の第 11 章前半では、世界の終焉と再生、そして生命（有情）の発生までが語られていた。それによれば原初の有情は、寿命は非常に長く、容貌はみな等しく優れ、天空を飛翔するなど超常的な能力をそなえていたという。しかし続く本巻では、その有情が頽廃してゆく様子が描かれる。はじめ有情は、物質的な食事（段食）を一切口にしないが、創生期の大海の表面に浮かぶ「地味（pṛthvīrasa）」という物質を嘗めると、上質の蜂蜜の如きその味に耽溺する。すると身体は固く重く不浄となり、飛翔の能力を失う。また季節・年歳、昼・夜の区別といった時間の観念が発生し、年老いることを知る。さらに、食物を食べる量の多少によって、それまでみな等しかった有情の容貌に美醜の個体差が生じ、そこから差別が起こる。やがて地味は食べ尽くされ、有情は代わりに「地皮餅（pṛthvīparvṭaka）」を食し、さらにそれも失われると「林藤（vana-lāta）」を摂る、というように、有情は次第に粗大な食物を口にするようになり、同時に道徳倫理も堕落して、諸々の不浄と不善がそなわり、寿命は縮み、互いに反目しあう。林藤も失うと、有情は米を食べるが、乱獲のために天然米は次第に不足し、土地の境界を定めて各々の田畑を所有するようになる。その結果、他人の土地の米を盗む者が現れ、諍いが起きる。

この諍いを収めるのがマハーサンマタ（Mahāsaṃmata, 多敬）である。マハーサンマタは諸田とその所有者たる人民を統治し、争いをしずめ、法と戒とを制定する。つまりこのマハーサンマタこそ人類史上最初の王であり、釈迦族の王統に連なる遙かな祖である。本章は最後に、マハーサンマタに始まりブッダに至る歴代の王位継承者の名を列挙した、二種類の系譜（後述）を引用して結ばれる。

【第 12 章】須弥山の構造的説明。須弥山の形状と大きさ、そこに住する神々、須弥山の四側面、須弥山の山頂、須弥山の段階の状態などが詳しく説明され、同様に須弥山を取り囲む諸外輪山の構造が説明さ

れる。

【第 13 章】須弥山周辺の状況。須弥山は七重の外輪山およびそのそれぞれの隙間に位置する輪状の内遊海に囲まれている。また、須弥山の四方には四天王すなわち持国天・増長天・広目天・毘沙門天の宮殿があり、また外輪山および内遊海の外、外海の四方には、東勝身州・南贍部州・西牛貨州・北倶盧州の四大陸、およびそれに付属する八小州が浮かんでいる。それらの説明を後、本章はさらに、上は色界諸天から下は八大有情地獄にいたる須弥山世界の階層構造について、簡単な解説を加えて結ばれる。この末尾部分は続く第十四章「地獄の解説」へのイントロダクションの役割も果たしている。

以上のうち、資料的な面から問題の多い第 11 章末尾「諸王の系譜」について簡単に触れておきたい。ここでは原初の王マハーサンマタに始まり、スッドーダナから釈尊を経てラーフラで途絶えることになる王の血脈が、二種類の系譜の引用によって語られている。

11-37. 諸王の系譜：第一の引用［*Peking*. Khu 76b2］では『**婆斯咤跋羅陀幡闍教誨**』(gNas ' jog dang Ba ra dva dza lung bstan pa, *V-$\bar{a}$is$\underset{\cdot\cdot}{t}$haBhāradvājavyākara$\underset{\cdot}{n}$a) というアーガマの引用として、60 人ほどの王の名を列挙するリストが紹介される。タイトルから判断して、これはパーリ長部 No.27「転輪王獅子吼経」(*Aggañña-Suttanta*) [*DN*. Vol. Ⅲ pp.80-98]、『長阿含経』No.5「小縁経」[*T*. 1, 36b-39 a]、『中阿含経』No.154「婆羅堂婆経」[*T*. 1, 673b-677a] および大正 No. 10『白衣金幢二婆羅門縁起経』[*T*. 1, 216b-222a] の異本と予想されるが、現行漢訳阿含と一致する部分はそれほど多くない。また引用を終えるにあたって、論は「これは、かの大徳 (Mahātman) らが論 (abhidharma) 中に詳しく説かれた王系を簡略に説いたものである」[79a3] と述べており、あるいはその原典は阿含ではなくア

ビダルマでなかったかという推測の余地も残す。

11-38. 諸王の系譜：第二の引用［79a3］では「律（Vinaya）にいわく」と言って160人ほどの王の名から成る膨大な系譜が紹介される。この律とは根本有部律を指すようで、実際、義浄訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻1［T. 24, 99a］と一定の対応をみる。しかし詳しく比較検討すると相違点も少なからず見いだされ、さらに緻密な検討が必要である。

なお『世間施設』写本研究の第一人者ジーグリンデ・ディーツ教授によれば、いわゆるギルギット出土『世間施設』サンスクリット断簡（ウッジャインのScindia Oriental Musiamに保管されているギルギット出土資料No.4737中の六葉）に、この律の引用部分に相当し、かつ内容がチベット文テクストと対応しない特異な一葉が現存する（5［1］r, = Sengupta No. 207)。すなわちチベット文テクストではブッダの息子ラーフラで王族の系譜が終わっているのに、ギルギット梵文断簡ではさらにマウリヤ朝の諸王の断片的なリストが続いている、というのである（Siglinde Dietz, Remarks on a Fragmentary List of Kings of Magadha in a Lokaprajñapti fragment, *WZKS* 33, 1989, pp.121-128)。これは、神話伝説上の王の系譜の末尾にマウリヤ朝の歴代王の名を加え、それらの王の正当化もしくは権威づけをはかった異本のようである。

またディーツ教授は、これら二種の系譜も含めた第11章の後半全体（[70b4-82a6］目次でいえば11-30から11-38）が、根本有部律破僧事サンスクリット本『サンガベーダヴァスツ』（Raniero Gnoli, The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, being the 17th and last section of the Vinaya of the Mūlasarvāsti-vādin, Part I, Roma, 1977, 7-21）に対応する、とも報告している（Siglinde Dietz, A Brief Survey on the Sanskrit Fragments of the Lokaprajñaptiśāstra., *Annual Memoirs of the Otani Universety Shin Buddhist Comprehensive Research Institute,* 7, 1989)。しかし今回『サンガベーダヴァスツ』の参照が間に合わず、こ

の点については未確認である。怠惰を詫びるとともに向後の課題としたい。

話題を再び引用文献に戻せば、これら二種の王族の系譜は『青史』(『デプテルゴンポ』) に「世間施設にいわく」と典拠を明らかにしたうえでほぼそのまま引用されている。そこで今回は『青史』英訳本 (George Romerich Tr, *The Blue Annals*, Part I, The Royal Asiatic Society of Bengal, 1949, pp.12-13, 13-16) に基づいて固有名の還元サンスクリット語を挿入した。したがって以下の訳文中の当該箇所に挿入される王や都城のサンスクリット名は、加藤清氏のオリジナル草稿にあったものではなく、また最前述べたとおり『サンガベーダヴァスツ』との照合も済んでいないことをお断りしておく。

以上のように未だ改訂の余地を残した暫定稿ではあるが、ともかくこれで『世間施設』第1章から第13章までを紹介し終えた。残るは最終章、第14章のみである。この章はいわゆる「八大地獄・十六小地獄」の解説を主題としている。分量的には第8巻の後半3分の2および最終第9巻全文がこれにあたり、今回扱った第11章に次いで長い。とはいえ、できるだけ早期の公表を目指して作業を進めてゆきたい。

【付記】　本稿脱稿後「諸王の系譜」に関する近年の論考として、平岡聡「血脈か法脈か—根本有部律破僧事と Mahāvastu とに見る釈尊の系譜—」(『印度哲学仏教学』15号、2000年) があることを知った。

福田　琢（編）

蔵文和譯『世間施設』(5)

加藤　清

目次

第7巻

第11章　世界の滅亡と生成、および人類の歴史（承前）

11-31. 有情、地味を食すること [71a6]／11-32. 有情、地皮餅を食すること [72a7]／11-33. 有情、林藤を食すること [72b7]／11-34. 有情、天然米を食すること [73a7]／11-35. 有情の回顧と悲嘆 [74a7]／11-36. 多敬王の出現 [76a2]／11-37. 諸王の系譜：第一の引用（『婆斯咤跋羅陀幡闍教誨』）[76b3]／11-38. 諸王の系譜：第二の引用（『根本説一切有部毘奈耶破僧事』）[79a3]

第12章　須弥山および外輪山

12-1. 風輪・水輪・金輪・大内海・大外海の構造 [82b2]／12-2. 須弥山の構造 [82b8]／12-3. 諸山の状態と名称の由来：持雙山 [83b8]／持軸山 [84a3]／檐木山 [84a6]／善見山 [84b1]／馬耳山 [84b4]／象耳山 [84b7]／尼民達羅山 [85a2]／鉄囲山 [85a5]／諸外輪山 [85b1]

第8巻

第13章　須弥山世界の構造

13-1. 七遊海 [85b7]／13-2. 四天王の宮殿とその周辺：東方持国天宮 [87a1]／南方増長天宮 [88a6]／西方広目天宮 [88b1]／北方毘沙門天宮 [88b3]／総頌 [88b4]／13-3. 四州および八小州：四州 [89a2]／八小州 [89b6]／13-4. 諸

世界の階層構造：諸天における知見の分際［89b8］／八大有情地獄［90a5］／六欲天および色界諸天［90a8］／八種の雲［90b4］

第7巻

［*Peking*. No. 5588 Khu 71a6］世間施設第七巻なり。

第11章　世界の滅亡と生成、および人類の歴史（承前）

（Cf.『大毘婆沙論』巻135［*T* .27, 700b］：『倶舎論』世間品［山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明　世間品』法蔵館, 1955, p.490］）

11-31. 有情、地味を食すること

［71a6］その時、貪愛の性（lolupa-jātīya）なる或る有情は、地味（pṛthvī-rasa）を指先に採りて試食せり。嘗味すればする程に消費し、消費すればする程に段食（kavaḍīkārāhāra）をなすなり。

［71a8］他の有情等は、それ等の有情が地味を指先に採りて試食せるを見るなり。見て、それ等の有情も又また地味を指先に採りて試食するなり。嘗味すればする程に消費し、消費すればする程に段食をなすなり。

［71b2］それ等の有情は地味なるそれらの段食によりて、身は固く重くなり、光耀と顕色の色とは消失し、世間に暗黒は生起せり。法爾として、世間に暗黒生起すれば太陽と月との此の二は世間に生起し、諸星辰と夜と昼と時候と諸年歳と刹那と臘婆と須臾とは世間に生起するなり。

［71b4］それより彼等有情、東方より日輪の昇りし時、彼等は斯く「天光なるものは真に此なり、天光なるものは真に此なり」とて、名は「日中、日中」と称せらるるなり。

［71b5］それより彼等有情、西方に日輪の沈みし時、彼等は斯く「天光

なるもの、赤色になるは真に此なり、天光なるもの、赤色になるは真に此なり」とて「夜、夜」と名づけられ、数を以て数えらるるなり。

[71b7] それより彼等有情、東方より月輪の昇りし時、彼等は斯く「暗黒に彩色せしむるなり、暗黒に彩色せしむるなり」とて「月、月」と名づけられ、数を以て数えらるるなり。

[71b7] それより彼等有情、東方より復た日輪の昇りし時、彼等は斯く「天光なるものの円輪は真に此なり、天光なるものの円輪は真に此なり」とて「太陽、太陽」と云ふ名は生起せり。

[71b8] 彼等は、その食物（bhojana）とその段食（āhāra）とを食して、長寿にして長時に住するなり。彼等の中、食を甚だ多く食せる者は悪色になり、食を甚だ少なく食せる者は善色になるなり。此の如く食の種々によりて容色に種々あるなり。

[72a2] 容色に種々あるを以て「嗚呼、有情よ、我は善色なり、汝は悪色なり」とて有情は有情を侮蔑するなり。容色の増上慢（abhimāna）を持して彼等は悪・不善の法そのものを如実に執持し、故に地味は隠没せり。

[72a4] その時、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣し「嗚呼、地味。嗚呼、地味」と此の如き語を作して曰へり。譬へば現在の諸人、或る最善の段食を得て、前のそれ等の文字と語と名を随学（anu√śiks）して「嗚呼、美味。嗚呼、美味」と此の如く云ふが如く、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣し「嗚呼、地味。嗚呼、地味」と此の如き語を作して曰へり。

[72a7] 然れども「此の語の意味は是なり、此の語の意味は是なり」と云へるも、その意味はまた知らざるなり。

三〇三

11-32. 有情、地皮餅を食すること

[72a7] 地味は沒して、彼等有情には、色を具足し、香を具足し、味を

具足せる地皮餅（pṛthvī-parvaṭaka）生ぜり。色は譬へば少女花（karṇikāra-puṣpa）の如し。味は譬へば蜂蜜を煮るが如きなり。

[72b1] 彼等は、その食物とその段食とを食して、長寿にして長時に住するなり。彼等の中、段食を甚だ多く食せる者は悪色になり、食を甚だ少なく食せる者は善色になるなり。此の如く食の種々によりて容色に種々あるなり。

[72b2] 容色に種々あるを以て「嗚呼、有情よ、我は善色なり、汝は悪色なり」とて有情は有情を侮蔑するなり。容色の増上慢を持して彼等は又それ等の悪・不善の法そのものを如実に執持し、故に地皮餅もまた隠没せり。

[72b4] その時、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣し「嗚呼、悲哉。嗚呼、悲哉」と此の如き語を作して曰へり。譬へば現在の諸人中の或る者が長時の病にあり、次第に悪しくなりて以前の文字と語と名を随学し、此の如く「嗚呼、悲哉。嗚呼、悲哉」と云ふが如く、彼等有情は集り聚りて、と云はるるより、悲泣し〔云々〕と云はるるまでは前に説かれたるが如し。

[72b7] 然れども「此の語の意味は是なり、此の語の意味は是なり」と云へるも、その意味はまた知らざるなり。

11-33. 有情、林藤を食すること

[72b7] 地皮餅は沒して、彼等有情には、色を具足し、香を具足し、味を具足せる林藤（vana-lāta）生ぜり。色は譬へば雍菜花（? ka dma' bu ka'i me dog）の如し。味は譬へば蜂蜜を煮るが如きなり。

[72b8] 彼等は、その食物とその段食とを食して、長寿にして長時に住するなり。彼等の中、食を甚だ多く食せる者は悪色になり、食を甚だ少なく食せる者は善色になるなり。此の如く食の種々によりて容色に種々あるなり。

[73a2] 容色に種々あるを以て「嗚呼、有情よ、我は善色なり、汝は悪

色なり」とて有情は有情を侮蔑するなり。容色の増上慢（abhimāna）を持して彼等はまた悪・不善の法そのものを如実に執持し、故に林藤もまた隠沒せり。

[73a4] 林藤沒するを以て、その時、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣して曰はく「彼方へ去れ、彼方へ去れ」と。譬へば現在の諸人中の或る者、粗語の非難もて罵詈せんと欲して、それ等の以前の文字と語と名を随学し、此の如く「彼方へ去れ、彼方へ去れ」と云ふが如く、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣して「彼方へ去れ、彼方へ去れ」と云ふなり。

[73a6] 然れども「此の語の意味は是なり、此の語の意味は是なり」と云へるも、その意味はまた知らざるなり。

11-34. 有情、天然米を食すること

[73a7] 林藤は沒して、彼等有情には、色を具足し、香を具足し、味を具足せる、不蒔・不耕の天然粳米（akṛṣṭopta-taṇḍula-phala-śāli）生ぜり。屑粒（kaṇā）もなく、籾殻（tuṣa）もなく、清浄にして無垢なり。四指程にして普き覆殻もなく、そを朝に刈れば暮に生じ、暮に刈り取れば朝には生ずるなり。此の如く刈りて生ぜしものを刈れば、再び現生せず。

[73b1] 彼等は、その食物とその段食とを食して、長寿にして長時に住するなり。彼等有情、此の如き不蒔不耕の天然粳米を、漸次に普く享用せしを以ての故に、彼等に異根生起せり。或る者は女根、或る者は男根を生起せり。その時、女根を持するものと男根を持するものとは相互に瞻視するなり。瞻視すればする程、偏貪するなり。偏貪すればする程、羞恥を知らざるなり。羞恥を知らざれば知らざる程、邪を懐くなり。

[73b4] 他の有情等は又、有情が非合理を作すそのことを見る。見て、また垢を見て、土塊と砂と、瓦等さへも擲げ「悪にして癡なる有情

は作すべからざるを作せり。今や有情は有情の罪過を生起せるを以て何処にか擯斥すべし」と斯く云ふなり。譬へば現在の諸人、嫁を娶るに、諸親属は花、若しくは炒米、若しくは栴檀の粉末等を以て撒布し「姉妹よ、幸福なるべし、幸福なるべし」と斯く云ふが如く、彼等有情は、有情が相互に非合理を作すを見て「〔今や〕有情は……〔乃至〕前の如く……有情は有情の罪過を生起せるを以て何処にか擯斥すべし」と云ふなり。

[73b7] 斯くして、以前に非法と云はれたるもの、今の諸人に於ては法と云はるるなり。以前の恥ずべきこと、今の称賛さるべきこととなり、かるが故に彼等有情は、不善の不妙法（asaddharma）を耽着し、惹起し、決定して一方に去り、家を作りて入り、装備す。其処に於て「我等二人は不応作をなさん」と云ひ、以て「家、家」と云はるる名は生起せり。

[74a2] 彼等は午後に食を欲せば午後に天然粳米を取り、朝に欲せば朝に取れり。〔然れども〕彼等有情の中の懶惰なる或る者達は、朝の天然粳米を午後に取れり。それ故、他の有情が彼の有情に「嗚呼、有情よ、いざ我等二人は天然粳米を取りに詣らん」と斯く曰ひしも、彼は「嗚呼、有情よ、汝は自らの天然粳米を取らんが為に精進すべし。我は朝の天然粳米を晩に取れり」と斯く曰へり。

[74a4] その時、彼の有情は「朝の天然粳米を午後に取れる。此は善し、此は甚だ善し。由つて我等は二日、三日、乃至七日に至るまでの天然粳米を取らん」と思惟して日々の天然粳米を取れり。その為に彼等、不耕・不蒔の天然粳米を普く集蓄して受用し、受用せしが故に、天然粳米はそれより屑粒と籾殻とを生じ、刈りたる全ては生ぜず、刈りて再び現生せる諸天然粳米も、点々と在るのみなり。

三〇〇

11-35. 有情の回顧と悲嘆

[74a7] その時、彼等有情は集り聚りて懊悩し、後悔し、悲泣して曰は

く「嗚呼、我等はかつて容色善く、意生にして、無垢完全なる諸根と一切の肢体とを具へ、善と妙色と歓喜食と歓喜縛食とを〔持し〕、自ずから光耀を発し、虚空を飛行し、長寿にして長時に住せり。我等の中、食を甚だ多く食せる者は悪色になり、食を甚だ少なく食せる者は善色になるなり。此の如く食の種々によりて容色に種々あるなり。容色に種々あるを以て“嗚呼、有情よ、我は善色なり、汝は悪色なり”とて有情は有情を侮蔑して、我等は容色の増上慢の悪・不善法そのものを如実に執持し、故に地味は沒して、彼等有情には、色を具足し、香を具足し、味を具足せる地皮餅生ぜり。色は譬へば少女花の如し。味は譬へば蜂蜜を煮るが如きなり」

[74b5]「我等はその食物とその段食とを食して、長寿にして長時に住するなり。我等の中、段食を甚だ多く食せる者は悪色になり、食を甚だ少なく食せる者は善色になるなり。此の如く食の種々によりて容色に種々あるなり。容色に種々あるを以て“嗚呼、有情よ、我は善色なり、汝は悪色なり”とて有情は有情を侮蔑するなり。我等は容色の増上慢を以てそれ等の悪・不善の法そのものを如実に執持し、故に林藤もまた隠沒して、色を具足し、香を具足し、味を具足せる不蒔・不耕の天然粳米生ぜり。屑粒もなく、籾殻もなく、清浄にして無垢なり。四指程にして普く被覆もなく、そを朝に刈れば暮に生じ、暮に刈れば朝には生ずるなり。此の如く、刈りたるは生ぜしも刈りて再び現生せず」

[75a6]「我等は、その食物とその段食とを食して、長寿にして長時に住するなり。その為に我等、不耕・不蒔の天然粳米を普く集蓄して受用し、受用せしが故に、天然粳米はそれより屑粒と籾殻とを生じ、刈りたる全ては生ぜず、刈りて再び現生せる諸天然粳米も、点々と在るのみなり。いざ我等は“是は汝のものなり、是は我のものなり”とて諸地を量りて分配し、分界を設けん」とて、彼等は「是は汝のものなり、是は我のものなり」とて諸土地を測りて区分し分界を設

けり。

[75b1] 時に或る有情、己が天然粳米あるに他人の天然粳米を取る。他の有情は、彼の有情、己が天然粳米あるにも拘わらず、他人の天然粳米を取るを見る。見てまた斯く曰はく「悪癡なる有情よ、汝は為すべからざるを為せり、嗚呼、有情よ、己が天然粳米あるにも拘わらず、他人の天然粳米を、与へられざるに取るとは云何。嗚呼、有情よ、汝は去れ、今後是の如きことは為すべからず」と。

[75b3] それより後、かの有情は、己が天然粳米あるにも拘わらず、二度、三度と他人の天然粳米の与へられざるを取る。かの有情は、己が天然粳米あるにも拘わらず二度、三度と他人の天然粳米の与へられざるを取るかの有情を見、見てまた斯く曰はく「悪癡なる有情よ、汝は為すべからざるを為せり、嗚呼、有情よ、己が天然粳米あるにも拘わらず、他人の天然粳米を、与へられざるに取るとは云何」と。

[75b5] 彼の両手を取りて、彼を彼方へ此方へと引回し、その時また衆中にて召喚すらく「有情等よ、此の有情、己が天然粳米あるにも拘わらず、他人の天然粳米を与へられざるに取るものと知るべし」と。

[75b6] 時にそれらの有情はかの有情に斯く曰はく「悪癡なる有情よ、汝は為すべからざるを為せり、汝は、己が天然粳米あるにも拘わらず、他人の天然粳米を、与へられざるに取るとは云何。嗚呼、有情よ、汝は去れ、今後是の如きことは為すべからず」と。

[75b6] 時にそれらの有情にかの有情は斯く曰はく「有情等よ、此の有情、天然粳米のために我を彼方へ此方へと引回し、衆中にて召喚せることを知るべし」

[75b8] 時に彼等有情はその有情に斯く曰はく「嗚呼、有情よ、汝は天然粳米のために有情を彼方へ此方へと引回し、衆中にて召喚せるとは云何。嗚呼、有情よ、汝は去れ、今後是の如きことは為すべからず」と。

11-36. 多敬王の出現

［76a2］時にかの有情らは斯く思惟すらく「天然粳米のために引回して衆中にて召喚することあるを以て、我等は集会し、我等の中で甚だ容姿善く、甚だ楽見にして甚だ端厳、甚だ大器（mahendra）なりと称せらるる有情を我等の地田主に任命して、我等の中、時々に懲罰すべき諸種姓あれば懲罰し、饒益すべき諸種姓あれば饒益し、我等の諸田より生ぜんものの中より、我等は時に法に従ひて収穫の一部を与へん」と。

［76a5］時に彼等有情は集会して、彼等の中で甚だ容姿善く、甚だ楽見にして甚だ端厳、甚だ大器なりと称せらるる有情に斯く曰はく「嗚呼、有情よ来たれ、いざ汝は我等の地田主になるべし。有情よ、我等の中、時々に懲罰すべき諸種姓あれば懲罰し、饒益すべき諸種姓あれば饒益すべし。我等の諸田より生ぜんものの中より、我等は時に法に従ひて収穫の一部を与へん」と。

［76a8］時に「多くの人々によりて尊敬せられたり、多くの人々によりて尊敬せられたり」とて「多敬（Mahāsaṃmata）」「多敬」と云ふ名、生ぜり。諸田の主となり、貧窮より保護せんが為に「王種（kṣatriya）」「王種」と云ふ名、生ぜり。法と戒との行を普く行じ、慧の行も亦、普く行じて、衆を歓喜せしめんが故に「王（rājan）」「王」と云ふ名、生ぜり。

11-37. 諸王の系譜：第一の引用

（Cf. パーリ長部 No.27「転輪王獅子吼経」*Aggaññasuttanta*［*DN.* Vol. Ⅲ pp.80-98］：『長阿含経』No.5「小縁経」［*T.* 1, 36b-39a］：『中阿含経』No.154「婆羅堂婆経」［*T.* 1, 673b-677a］：大正 No. 10『白衣金幢二婆羅門縁起経』［*T.* 1, 216b-222a］：『青史』George Romerich Tr, *The Blue Annals*, Part I, The Royal Asiatic Society of Bengal, 1949, pp.12-13）。

[76b3] 世尊は亦『婆斯咤跋羅陀幡闍教誨』(*VasisthaBhāradvājavyākaraṇa) にて斯く〔告げたまへり〕

[76b3]「婆斯咤よ、云何の用と云何の縁を以て王種 (kṣatriya) の父系は世間に出現せるや。此の世間、破壊に破壊を重ねし時、世間に於る多くの有情は光音天種に生るるなり。彼等は此の処にて、容色善く、意生にして、無垢完全なる諸根と一切の肢体とを具へ、善と妙色にて、自ずから光耀を発し、虚空を飛行し、歓喜食と歓喜縛食とを食し、長寿にして長時に住す。実に斯くある時、また此の機会あるなり。此の世間成じ、成じ已りて世間に於るこの大地は一水一海となる。実に斯くある時、また此の機会あるなり。一水一海になりし大地の上に、風は泡沫を普く集め、普く凝固せしむ……と云はるるより前の如く……多くの人々によりて尊敬せられたるが故に“多敬 (Mahāsammata)”と云ふ名、生ぜり。諸田の主となり、貧窮より保護せんが為に“王種 (kṣatriya)”“王種”と云ふ名、生ぜり。法と戒との行を普く行じ、慧の行も亦、普く行じて、衆を歓喜せしめんが故に“王 (rājan)”“王”と云ふ名は生ぜり。……と云はるるまでは、普く説かるるなり」

[77a1]「婆斯咤よ、此が王種の父系の世間に生起せし因縁の最勝なるものなり。そは如法に為され、爾も非法によりては為されざるなり。かるが故に此は諸勝者の主の法なり」

[77a2]「多敬が〔大王と〕なりし時、諸人の名は“有情 (sattva)”“有情”と云ふなり。〔摩訶〕三摩多の子は“妙光 (Roca)”と云ふなり。妙光が大王となりし時、諸人の名は“箕 (pūrvāṣāḍhā)”“箕”と云ふなり。妙光の子は“善 (Kalyāṇa)”と云ふなり。善が王となりし時、諸人の名は“芝麻生 (tilajāta)”“芝麻生”と云ふなり。善の子は“勝善 (Varakalyāṇa)”と云ふなり。勝善が王となりし時、諸人の名は“雲頸 (meghakaṇṭa)”と云ふなり。勝善の子は“長浄 (Uposadha)”と云ふなり。長浄が王となりし時、諸人の

名は“多羅尚伽（tālajanghā）”と云ふなり」

[77a6]「長浄王の頭頂に一水疱生起せり。柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜、若しくは綿の花弁の如きなり。そは少しくも悩害なく、そは熟して破れ、妙色、喜見、端厳にして三十二大丈夫相を持したる童子を生ぜり。名は“頂生（Mūrdhata）”“頂生”と云ひ、且つ“自乳（Māndhātṛ）”“自乳”と云ふなり。その童子は神変大にして威力大となれり。彼は四州に王位の自在と主権とを行なへり。自乳王生起せし時、甚大なる治法の総てを伺察し、思惟し、覚知し、観察して、それ以降、現在に至るまで諸人の名は“具伺（vicāraka）”“具思（caitanya）”“具観察（upaparīkṣa）”“意生（jñānajāta）、意生”と云ふなり」

[77b2]「自乳王の右腿に一水疱生起せり。柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜、若しくは綿の花弁の如きなり。そは少しくも悩害なく、そは熟して破れ、妙色、喜見、端厳にして三十二大丈夫相を持したる童子を生ぜり。右足より生起せしが故にその名は“端厳（Cāru）”“端厳”と云ふなり。その童子は神変大にして威力大となれり。彼は三州に王位の自在と主権とを行なへり」

[77b5]「端厳王の左腿に一水疱生起せり。柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜、若しくは綿の花弁の如きなり。そは少しくも悩害なく、そは熟して破れ、妙色、喜見、端厳にして三十二大丈夫相を持したる童子を生ぜり。左足より生起し、左足より生起せしが故にその名は“近端厳（Upacāru）”“近端厳”と云ふなり。その童子は神変大にして威力大となれり。彼は二州に王位の自在と主権とを行なへり」

[77b7]「近端厳王の上足に一水疱生起せり。柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜、若しくは綿の花弁の如きなり。そは少しくも悩害なく、そは熟して破れ、妙色、喜見、端厳にして三十二大丈夫相を持したる童子を生ぜり。そは上足より生起せしが故にその名は“具端厳（Cāruka）”“具端厳”と云ふなり。その童子は神変大にして

威力大となれり。彼は一州に王位の自在と主権とを行なへり」

[78a2]「具端厳王の最下足の下より一水疱生起せり。柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜、若しくは綿の花弁の如きなり。そは少しくも悩害なく、そは熟して破れ、妙色、喜見、端厳にして三十二大丈夫相を持したる童子を生ぜり。そは最下足の下より生起し、最下足の下より生起せしが故にその名は“持端厳（Cārumant）”“持端厳”と云ふなり。その童子は神変大にして威力大となれり。彼は一州に王位の自在と主権とを行なへり」

[78a5]「それより以降の諸転輪聖王は一州のみに主権ありしと知らるべきなり」

[78a6]（Cf.『翻訳名義集』転輪王名目、No.3562-3582）「持端厳の子は能捨（Muci）なり。能捨の子は極捨（Mucilinda）なり。極捨の子は瑞鳥（Śakuni）なり。瑞鳥の子は大瑞鳥（Mahāśakuni）なり。大瑞鳥の子は香草（Kuśa）なり。香草の子は近香草（Upakuśa）なり。近香草の子は大香草（Mahākuśa）なり。大香草の子は妙見（Sudarśana）なり。妙見の子は大妙見（Mahāudarśana）なり。大妙見の子は除害（Vāmaka）なり。除害の子は具力（Aṅgiras, Shes ldan：『青史』は Suvarṇa, gSer mdog の名を挙げる）なり。具力の子は具福（Bhāgin）なり。具福の子は棄悪（Bhṛgu）なり。棄悪の子は妙高（Meru）なり。妙高の子は決行（Nyaṅku）なり。決行の子は極哮吼（Praṇāda）なり。極哮吼の子は大極哮吼（Mahāpraṇāda）なり。大極哮吼の子は作楽（Śaṅkara）なり。作楽の子は方主（Diśāṃpati）なり。方主の子は妙塵（Sureṇu）なり。妙塵の子は作満（Bharata）なり。作満の子は大天（Mahādeva）なり」

[78b2]「大天の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千王は、弥梯羅城（Miśrakapura）に於て王位の自在と主権とを行なへり。彼等の最後に“輻輪”（Nemi）と名づくる王は出現し、輻輪の子は上勝

（Jayaka）なり。上勝の子は弥盧（Meru）なり。妙高の子は作怖車（Bhīmaratha）なり。作怖車の子は百車（Śtaratha）なり。百車の子は十車（Daśaratha）なり。十車の後に五千の般遮羅王（Pañcālarājan）が王位の自在と主権を行なへり」

[78b4] 五千の般遮羅王の後に五千の羯陵伽王（Kaliṅgarājan）が王位の自在と主権を行なへり。五千の羯陵伽王の後に七千の阿湿摩伽王（Aśmakarājan）出現し、七千の阿湿摩伽王の後に八千の倶盧王（Kauravarājan）出現し、八千の倶盧王の後に九千の具額王（Kapālarājan）出現し、九千の具額王の後に一万の具支王（Avayavirājan? Yan lag can gyi rglyal po,『青史』には Geyarājan, kLu dbyangs gyi rgyal po の名を挙げる）出現し、一万の具支王の後に一万一千の摩揭王（Magadharājan）出現し、一万一千の摩揭王の後に一万五千の多摩梨帝王（Tāmaliptakarājan）出現し、一万五千の多摩梨帝王の後に甘蔗（Ikṣvāku）と名づくる王は出現せり」

[78b7]「甘蔗の嗣子と孫と曾孫の血統なる一千八百の甘蔗王は王位の自在と主権とを行なへり。彼等の最後に増長（Virūḍhaka）と名づくる王は出現し、増長には四子出現せり、即ち火炬（Ulkāmukha）と手耳（Karakarṇa）と象行（Hastiniyaṃsa）と持足厳（Nūpura）となり」

[79a1]「その時、持足厳の子、持足厳足（Nūpurapāda）と名づくる王は出現せり。持足厳足の子は婆斯咤（Vasiṣṭha）なり。婆斯咤の子は牛住（Goṣṭha）なり。牛住の子は獅子頬（Siṃhahanu）なり。獅子頬の子に四人あり。即ち浄飯（Śuddhodana）と白飯（Śuklodana）と斛飯（Droṇodana）と甘露飯（Amṛtodana）となり。浄飯の太子が世尊（Bhagavat）なり。世尊の太子が羅睺羅（Rāhula）なり」

[79a3] 是は且らく論（abhidharma）より出されたる王系にして、かの諸大徳（Mahātman）が広説より略説せられたるものなり。

11-38. 諸王の系譜：第二の引用

(Cf.『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻一：『青史』The Blue Annals, Part I, pp.13-16)

[79a3] 毘奈耶（Vinaya）の中にも又、此処に出されたるが如くに記述せられてあるなり。

[79a4]「多敬（Mahāsaṃmata）と、妙光（Roca）と、善（Kalyāṇa）と、勝善（Varakalyāṇa）と、長浄（Uposadha）と、自乳（Māndhātṛ）と、端厳（Cāru）と、近端厳（Upacāru）と、具端厳（Cāruka：『青史』に欠く）と、持端厳（Cārumant）と、作満（Bharata）と、愛（Tṛsna, *Sred pa*：『青史』は Bhāva, *Srid pa* の名を挙げる）と、近愛（Uparuci, *Nye sred pa*：『青史』は Abhāva, *Mi srid pa* の名を挙げる）と、能捨（Muci）と、極捨（Mucilinda）と、調色身（Tanujit）と、具力（Aṅgiras, *Shes ldan*：『青史』は Suvarṇa, *gSer mdog* の名を挙げる）と、棄悪（Bhṛgu）と、勝車（Jagadratha）と、具毒（Sagara, *Dug can* あるいは Sāgara）と、大具毒（Mahāsagara, あるいは Mahāsāgara）と、瑞鳥（Śkuni）と、大瑞鳥（Mahāśakuni）と、香草（Kuśa）と、近香草（Upakuśa）と、大香草（Mahākuśa）と、作満（Bharata）と、大作満（Mahābharata）と、妙見（Sudarśana）と、大妙見（Mahāsudarśana）と、除害（Vāmaka）と、近除害（Upavāmaka）と、孔雀（Śikhin）と、決行（Nyaṅku）と、作楽（Śaṅkara）と、極柔善（Praśānta）と、極哮吼（Praṇāda）と、持極清浄（*Rab tu dang ldan*,=Prasādavat?：『青史』は Pradayālu, *Srid pa* の名を挙げる）と、作光（Jyotiṣkara）と、弥盧（Meru, LHun po：『青史』に欠く）と、須弥盧（Sumeru, *Ri rab*）と、持弥盧（Merumant, *Lhun po ldan*）と、火焔（Jvāla）と、火焔鬘（Jvālamālin）と、持火焔（Jivālin）と、相続者なる子と孫と曾孫の相続なる十万王は、補怛洛（Potala）城に於て王

位の自在と主権とを行なへり」

[79a8]「彼等の最後に調怨（Śatrujit）と名づくる王は出現す。怨敵を調御せしが故に名を“調怨”と云へり。調怨王の嗣子と孫と曾孫の血統なる五万四千王は、無闘（Ayodhyā）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b1]「彼等の最後に無能勝（Ajitajit）と名づくる王は出現し、無能勝王の嗣子と孫と曾孫の血統なる六万三千の王は、波羅奈斯（Vārāṇasī）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b2]「彼等の最後に難當（Duṣyanta）と名づくる王は出現し、難當王の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千の王は、乾毘羅（Kāmpilya）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b3]「彼等の最後に梵授（Brahmadatta）と名づくる王は出現し、梵授王の嗣子と孫と曾孫の血統なる三万二千の王は、象閣城（Hastināpura）に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b4]「彼等の最後に象授（Nāgadatta）と名づくる王は出現し、象授王の嗣子と孫と曾孫の血統なる五千の王は、徳叉尸羅（Takṣaśilā）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b5]「彼等の最後に氈子（Romaputra）と名づくる王は出現し、氈子王の嗣子と孫と曾孫の血統なる三万二千の王は、肩胸（Uraśā）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b6]「彼等の最後に童勝力（Nagnajit）と名づくる王は出現し、童勝王の嗣子と孫と曾孫の血統なる三万二千の王は、無勝（Ajita）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b7]「彼等の最後に上勝（Jayaka）と名づくる王は出現し、上勝王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一万二千の王は、妙童女（Kanyākubja）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[79b8]「彼等の最後に勝軍（Jayasena）と名づくる王は出現し、勝軍王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一万八千の王は、瞻波（Campā）城

に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a1]「彼等の最後に龍天（Nāgasena）と名づくる王は出現し、龍天王の嗣子と孫と曾孫の血統なる二万五千の王は、答麻哩（Tāmralipti）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a2]「彼等の最後に人天（Naradeva）と名づくる王は出現し、人天王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一万二千の王は、答麻哩城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a3]「彼等の最後に海天（Sagaradeva）と名づくる王は出現し、海天王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一万八千の王は、象城（Dantapura）に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a5]「彼等の最後に善慧（Sumati）と名づくる王は出現し、善慧王の嗣子と孫と曾孫の血統なる二万一千の王は、王舎（Rājagṛha）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a6]「彼等の最後に除闇（Marīci）と名づくる王は出現し、除闇王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一百の王は、波羅奈斯（Vārāṇasī）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a7]「彼等の最後に大自在〔帝〕軍（Mahendrasena）と名づくる王は出現し、大自在軍王の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千の王は、倶尸那（Kuśinagara）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80a8]「彼等の最後に海神（Samudradeva）と名づくる王は出現し、海神王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一千の王は、補怛洛（Potala）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80b1]「彼等の最後に修苦行（Tapaskara）と名づくる王は出現し、修苦行王の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千の王は、倶尸那（Kuśinagara）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80b2]「彼等の最後に地主（Bhūpati）と名づくる王は出現し、地主王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一千の王は、波羅奈斯（Vārāṇasī）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80b3]「彼等の最後に地上（Pārthiva）と名づくる王は出現し、地上王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一千の王は、無闘（Ayodhyā）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80b4]「彼等の最後に持地（Dharaṇīdhara）と名づくる王は出現し、持地王の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千の王は、弥恥羅城（Miśrakapura）に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[80b5]「彼等の最後に大天（Mahādeva）と名づくる王は出現し、大天王の嗣子と孫と曾孫の血統なる八万四千の王は、弥恥羅城に於て王位の自在と主権とを行ひ、一切〔王〕、弥恥羅〔城〕そのものと大天の菴羅樹園（Āmrapālivana）そのものとの中にて、王は仙人となりて、仙人の梵行を行ぜり」

[80b7]「彼等の後に美妙（Praṇīta）と名づくる王は出現し、美妙の子は儞彌（Nemi）なり。儞彌の子は堅儞彌（Nemisthira）なり。堅儞彌の子は大多（Bahuka）なり。大多の子は食（Bhoja）なり。食の子は近食（Upabhoja）なり。近食の子は有食（Bhojana）なり。有食の子は持食（Bhogavat）なり。持食の子は善見（Sudarśana）なり。善見の子は正見（Samadarśin）なり。正見の子は聴軍（Śrutasena）なり。聴軍の子は法軍（Dharmasena）なり。法軍の子は悟了（Budha）なり。悟了の子は大悟（Mahābudha）なり。大悟の子は悟軍（Budhasena）なり。悟軍の子は無憂（Aśoka）なり。無憂の子は離憂（Vigatāśoka）なり。離憂の子は堅界（Sīmasthira）なり。堅界の子は老界（Dhanavantari）なり。老界の子は多精勤（Dhundhumāla）なり。多精勤の子は曙（Aruṇa）なり。曙の子は方主（Diśāṃpati）なり。方主の子は妙塵（Surenu）なり。妙塵の子は作楽（Śankara）なり。作楽の子は一切喜（Ānanda）なり。一切喜の子は鏡面（Ādarśanamukha）なり。鏡面の子は能生（Janaka）なり。能生の子は勝群牛（Jinarṣabha）なり。勝群牛の子は持飲食（Bhoja）なり。持飲食の子は多

飲食（Bahubhuj）なり。多飲食の子は無勝（Ajita）なり。難勝の子は由他無勝（Aparājita）なり。由他無勝の子は堅固（Sthira）なり。堅固の子は極堅固（Susthira）なり。極堅固の子は大力（Mahābala）なり。大力の子は多乗（Mahāvahana）なり。多乗の子は善慧（Sumati）なり。善慧の子は堅乗（Sthirakumāla）なり。堅乗の子は十弓（Daśadhanvan）なり。十弓の子は百弓（Śatadhanvan）なり。百弓の子は九十弓（Navatidhanvan）なり。九十弓の子は最勝弓（Vijayadhanvan）なり。最勝弓の子は雑色弓（Citradhanvan）なり。雑色弓の子は堅弓（Dhanuḥsthara）なり。堅弓の子は牢弓（Dhanuḥsthira）なり。牢弓の子は十車（Daśaratha）なり。十車の子は百車（Aṣṭaratha）なり。百車の子は九十車（Navatiratha）なり。九十車の子は衆車（Viśvaratha）なり。衆車の子は雑色車（Citraratha）なり。雑色車の子は牢車（Gariṣṭharatha）なり。牢車の子は堅車（Dhṛtaratha）なり」

[81b1]「堅車王の嗣子と孫と曾孫の血統なる七万七千王は、無闘（Samantāvabhā）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[81b2]「彼等の最後に虚空主（Gaganapati）と名づくる王は出現し、虚空主王の子は龍護（Nāgarakṣita）なり。龍護王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一百の王は、波羅奈斯（Vārāṇasī）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[81b3]「彼等の最後に訖栗枳（Kṛkin）と名づくる王は出現す。その時、世尊・如来・応供・正等覚・明行足・善逝・世間解・無上調御・天人師・佛なる迦葉波（Kāśyapa）世尊、世に出現したまへり。時にかの菩薩〔訖栗枳〕世尊は、正等覚者なる迦葉波仏の許にて當来の菩提の為に祈願を欲し、梵行を修して兜率天に生まれたまへり。其処に於て菩薩は寿命の限り留まりたまへり」

[81b6]「訖栗枳王の子は善生（Sujata）と名づけられ、善王の嗣子と孫

と曾孫の血統なる一百の王は、補怛洛（Potala）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[81b7]「彼等の最後に耳（Karṇa）と名づくる王は出現し、耳王の子は喬答摩（Gotama）と波羅墮跋闍（Bharadvāja）の二なり。それ等の二〔子〕中、喬答摩の子は甘蔗（Ikṣuvāku）と名づけらるるなり。甘蔗王の嗣子と孫と曾孫の血統なる一百の甘蔗王は、補怛洛（Potala）城に於て王位の自在と主権とを行なへり」

[82a1]「彼等の最後に増長（Virūḍhaka）と名づくる王は出現す。増長に四子あり、即ち火炬（Ulkāmukha）と手耳（Karakarṇa）と象行（Hastiniyaṃsa）と持足厳（Nūpura）となり」

[82a2]「〔それ等の四子中〕持足厳の子が婆斯咤（Vasiṣṭha）なり。婆斯咤の子は牛住（Goṣṭha）なり。牛住の子は獅子頬（Siṃhahanu）と獅子吼（Siṃhanāda）の二なり。

[82a2]「〔それ等の二子中〕獅子頬に四子あり、即ち浄飯（Śuddhodana）と白飯（Śuklodana）と斛飯（Droṇodana）と甘露飯（Amṛtodana）となり。女児は清浄（Śuddhā）と純白（Śubhā）と純斛（Droṇā）と甘露（Amṛtā）となり」

[82a3]「浄飯に二子あり、世尊（Bhagavat）と尊者難陀（Nanda）となり。白飯に二子あり、尊者底沙（Tiṣya）と賢善（Bhadrika）となり。斛飯に二子あり、大名（Mahānāman）と阿那律（Aniruddha）となり。甘露飯に二子あり、尊者阿難（Ānanda）と調達（Devadatta）となり。甘露女の子は取寂静（Śāntādānā ? *zhi len*）なり」

[82a5]「世尊の太子は羅睺羅（Rāhula）なり」

[82a5]「此の如く多敬の血統は羅睺羅に至り、羅睺羅を以て断絶せり。羅睺羅は継嗣を断ち、有の道理を断ち、生の系列を断ち、今や有の生ずることなきなり」

[82a6] 世間施設第十一章なり。

第12章　須弥山および外輪山

[82a6] 頌（sūtra）に於て「風と水と敷地と、内と外の海と、須弥の諸側と頂と段階と諸山と地は云何にて生起し、風と水とはよく住し、それ等の一切の継起（堆積）せることは詳説せるを以て観察すべし。何処にてもよく止住し、曲風と引き裂くような大風は虚空より生起し、水と地と諸水と山と州と諸四〔天王〕と泉と湖とは下り、所有龍海獣（grāha）と、広大なる大海と富して豊満なる諸国土と、小城等と諸大城、それ等の一切は大地に漸次に能く止住するなり」

12-1. 風輪・水輪・金輪・大内海・大外海の構造

[82b2] 虚空中の一処に風輪は住する、その風輪の高さは百六十万由旬あり、広さは無量阿僧祇なり。

[82b2] 風輪中の一処に水輪は住する、その水輪の高さは八十万由旬、広さは百二十万四百五十由旬あり。全周は三百六十万三百五十由旬あり。

[82b4] 水輪中の一処に金の大敷地は住する、その金の大敷地の高さは三十二万由旬あり、広さは百二十万四百五十由旬あり。全周は三百六十万三百五十由旬あり。

[82b5] 大内海は縦二十四万由旬、横も又、二十四万由旬あり。全周に於ては九十六万由旬あり。深さは八万由旬ありて金の大敷地に依止するなり。

[82b6] 大外海は横、島を含めずして三十二万由旬あり、島を含めて横三十二万二千由旬あり、縦も又それと等し。全周に於ては無量なり。深さに於ては八万由旬あり、金の大敷地に依止するなり。

12-2. 須弥山の構造

[82b8] 須弥山王は八万由旬下方にて金の大敷地に依止し、八万由旬は水上に出て、高さは十六万由旬あり、縦八万由旬、横も又八万由旬

なり。形容は善く楽見するところにして端厳なり。四種の宝珠を以て成ぜられ、そこに三十三の諸天は住するなり。

[83a2] 須弥山王の側に四種あり。東方の側と、南方と西方と北方の側となり。東方の側は玻璃（水晶）を以て成ぜられ、南方の側は瑠璃を以て成ぜられ、西方の側は銀を以て成ぜられ、北方の側は金を以て成ぜられてあるなり。

[83a3] 須弥山王の山頂に四種あり。東方の頂と南方と西方と北方の頂となり。

[83a4] 東方の頂は縦百二十五由旬、幅も又百二十五由旬、全周は五百由旬あり。四由旬半は須弥山王より上方に出で、形容は善く楽見するところにして端厳、玻璃を以て成ぜられ、そこに諸の金剛手（Vajrapāṇi）夜叉は居住せり。

[83a6] 南方の頂は縦百二十五由旬、幅も又百二十五由旬、全周は五百由旬あり。四由旬半は須弥山王より上方に出で、形容は善く楽見するところにして端厳、瑠璃を以て成ぜられ、そこに諸の金剛手夜叉は居住せり。

[83a7] 西方の頂は縦百二十五由旬、幅も又百二十五由旬、全周は五百由旬あり。四由旬半は須弥山王より上方に出で、形容は善く楽見するところにして端厳、銀を以て成ぜられ、そこに諸の金剛手夜叉は居住せり。

[83a7] 北方の頂は縦百二十五由旬、幅も又百二十五由旬、全周は五百由旬あり。四由旬半は須弥山王より上方に出で、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられ、そこに諸の金剛手夜叉は居住せり。

[83a2] 須弥山王の段階（parisanda）に四種あり。第一の段階と第二と第三と第四となり。

[83a3] 第一の段階は水中より一万由旬上方に聳え、須弥山王より一万六千由旬後方に聳立し、形容は善く楽見するところにして端厳、四

種の宝珠を以て成ぜられ、そこに堅手（Karoṭapāṇi）の諸天は居住せり。

[83a4] 第二の段階は第一の段階より一万由旬上方に聳え、須弥山王より八千由旬後方に聳立し、形容は善く楽見するところにして端厳、四種の宝珠を以て成ぜられ、そこに持鬘（Mālādhara）の諸天は居住せり。

[83a5] 第三の段階は第二の段階より一万由旬上方に聳え、須弥山王より四千由旬後方に聳立し、形容は善く楽見するところにして端厳、四種の宝珠を以て成ぜられ、そこに恒憍（Sadāmada）の諸天は居住せり。

[83a6] 第四の段階は第三の段階より一万由旬上方に聳え、須弥山王より二千由旬後方に聳立し、形容は善く楽見するところにして端厳、四種の宝珠を以て成ぜられ、そこに諸々の四大王（Mahārājikā）は居住せり。

12-3. 諸山の状態と名称の由来

持双山

[83b8] 持双（Yugaṇḍhara）と名づけられたる山王、須弥山王より隔たること八万由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、四万由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。善見山王云何の故にか持双山王と云はるるや。曰はく、持雙山王の頂、形容善く楽見するところにして端厳なること、恰も車の双軛の如し。かるが故に持双山王と云はるるなり。

持軸山

[84a3] 持軸（Īṣādhara）と名づけられたる山王、須弥山王より隔たること四万由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、二

万由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[84a5] 云何の故にか持軸山王と云はるるや。曰はく、持軸山王の頂、形容善く楽見するところにして端厳なること、恰も車軸（īṣā）の如し。かるが故に持軸山王と云はるるなり。

檐木山

[84a6] 檐木（Khadiraka）と名づけられたる山王、持軸山王より隔たること二万由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、一万由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[84a8] 云何の故にか檐木山王と云はるるや。曰はく、それら檐木山王の域には応に金の檐木あれど、他山等はその如くに非ず。かるが故に檐木山王と云はるるなり。

善見山

[84b1] 善見（Sudarśana）と名づけられたる山王、檐木山王より隔たること一万由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、五千由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[84b3] 云何の故にか善見山王と云はるるや。曰はく、善見山王の頂は応に形容善く楽見するところにして端厳なれど、他山等はその如くに非ず。かるが故に善見山王と云はるるなり。

馬耳山

二八三

[84b4] 馬耳（Aśvakaṇa）と名づけられたる山王、善見山王より隔たること五千由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、二千五百由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は

善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[84b6] 云何の故にか馬耳山王と云はるるや。曰はく、善見山王の頂、形容は善く楽見するところにして端厳なること、恰も馬の耳の如し。かるが故に馬耳山王と云はるるなり。

障礙山

[84b7] 障礙（Vinataka）と名づけられたる山王、馬耳山王より隔たること二千五百由旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、千二百五十由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[85a1] 云何の故にか障礙山王と云はるるや。曰はく、障礙山王の頂、低く湾曲せること恰も盤洋の角の如し。かるが故に障礙山王と云はるるなり。

尼民達羅山

[85a2] 尼民達羅（Nimindhara）と名づけられたる山王、障礙山王より隔たること千二百五十旬にあり、八万由旬は水下なる金の大敷地に依止し、六百二十五由旬は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、金を以て成ぜられる。そこに四大王の諸天の小城と大城と城塞あり。

[85a4] 云何の故にか尼民達羅山王と云はるるや。曰はく、尼民達羅山王の頂、形容善く楽見するところにして端厳なること、恰も車輪（nemi）の如し。かるが故に尼民達羅山王と云はるるなり。

鉄囲山

[85a5] 鉄囲（Cakravāda）と名づけられたる山王は大外海に位置し、八万由旬は水中の金の大敷地に依止し、三百十二由旬半は水中より上方に聳ゆ。広さも又それと等しく、形容は善く楽見するところにして端厳、鉄を以て成ぜられる。そこに諸の青衣（nilāmbara）夜

又等は居住するなり。

［85a7］云何の故にか鉄囲山王と云はるるや。曰はく、それら鉄囲山王の域には応に金輪あれど、他山等はその如くに非ず。更に又、鉄囲山王は恰も輪を転ずるが如き次第を以て四州を転ずる。かるが故に鉄囲山王と云はるるなり。

諸外輪山の高さ

［85b1］持雙〔山〕の高さは四万由旬と説示されるなり。持軸〔山の高さ〕は二万由旬、一万〔由旬〕は檐木山、善見〔山〕の高さは五千由旬と説示され、二千五百由旬に馬耳〔山〕は普く聳立し、千二百五十〔由旬〕の数を得たる障礙〔山〕は聳立し、尼民達羅〔山〕の高さは六百二十五由旬を示し、此海（内海）の彼方なる海（外海）によりて囲繞せられたる鉄囲は三百由旬と十二由旬半あり。そは鉄囲〔山〕と説かるるなり。

［85b4］世間の間隙を限りとし、日と月と此の如く夥しき量と、宿星聚の一切は鉄囲を越えず、世間の間隙を越へては闇黒ならしむるなり。尼民達羅と障礙と、同じく馬耳と善見と檐木と持軸と持雙との此等七山は、山の最勝にして金を以て成じ、須弥等の諸山なるそれらは金の敷地に依止するなり。

［85b6］世間施設第十二章なり

第8巻

［85b6］世間施設第八巻。

第13章　須弥山世界の構成

二八一

［85b6］頌（sūtra）に於て「遊海と王宮と鉄囲と州等と諸小島と上と下と悪を離れて慧を以て享楽するなり」

13-1. 七遊海

[85b7] 持双山王と持軸山王との中間なるその区域に「持双の遊海（śītā）」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅は四万由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

＊編注：『倶舎論』世間品では須弥山と持双山の間に第一の内海があるとされるが、ここではそれについての言及はなく、持双山と持軸山の間の内海が第一とされる。したがって、七つの内海と一つの外海で八海とする『倶舎論』よりも、一つ海の数が少なくなっている点に注意。

[86a1] 持軸山王と檐木山王との中間なるその区域に「持軸の遊海」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅は二万由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

[86a3] 檐木山王と善見山王との中間なるその区域に「檐木の遊海」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅は一万由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

[86a5] 善見山王と馬耳山王との中間なるその区域に「善見の遊海」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅は五千由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

[86a7] 馬耳山王と障礙山王との中間なるその区域に「馬耳の遊海」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅は二千五百由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

[86b1] 障礙山王と尼民達羅山王との中間なるその区域に「障礙の遊海」と云はるるものあり、深さ八万由旬ありて金の大敷地に依止し、幅

は千二百五十由旬あり、形容は善く楽見するところにして端厳なり。水は清涼にして水は蜜の如く溢満し、龍王等が夥しく居住するなり。

[86b3]「持双の遊海」の境界（sīmā）は持双山なり。「持軸の遊海」の境界は持軸山なり。「檐木の遊海」の彼〔岸〕（pāraṃ）は檐木山なり。「善見の遊海」の境界は善見山なり。「馬耳の遊海」の境界は馬耳山なり。「障礙の遊海」の彼〔岸〕は障礙山なり。「尼民達羅の遊海」の境界は尼民達羅〔山〕なり。

[86b5]〔此等〕水を持する七の遊海は純粋なる瑠璃色の如し。甚だ清涼なる水と、及び蜂蜜の如き水とに満ち溢れ、花は随時に生じて遊海を装飾し、多伽羅（tegara）を生じ、同様に、達子（tāliśa）と甘松（gandhamaṃsī）と種々の薬草等とに満ち溢れるなり。同様に、恐ろしき大身中に激しき不壊の毒をもてる諸龍王は夥しく居住し、七山は可愛（manāpa）にして、山々の諸光とまた太陽の光線とによりて、太陽昇りて一臘婆程にて十方に耀くなり。金の七山は七遊海を普く囲繞し、諸山の主なる須弥の山頂を萎縮せしむるほどに聳立するなり。

13-2. 四天王の宮殿とその周辺

東方持国天宮

[87a1] 須弥山王の東方なる持双山王の頂上に「持国」（Dhṛtarāṣṭra）と名づけられる持国大王の宮殿あり。長さ二百五十由旬、幅も二百五十由旬、全周一千由旬ありて、形容は善く楽見するところにして端厳なり。金の墻壁を以て遍く遶らされ、墻壁の高さは半由旬ありて、その墻壁は金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の墻衛護あり。箭窓と連続せる橋梁とは四種あり。

二七九

[87a4] その中の敷地は形容善く、楽見するところにして端厳にして、画き、善く画き、百一の色の種類を以て画き、柔軟にして甚だ柔軟なること、恰も兜羅緜（tūla）若しくは綿の花弁の如きなり。足を

置くときは凹み、足を揚ぐる時はもとに復す。諸の非人は風の威力を以て枯れたる諸花を投げ捨て、新しき諸花を善く撒布するなり。此れの如く持国の福徳の威力によりて持国城に大風を起し、枯れたる諸花を吹き飛ばし、新しき諸花を善く撒布するなりと云はるるなり。

[87a7] その中に長さ二百五十由旬、幅一由旬半の徑路あり。形容は善く楽見するところにして端厳、金砂を撒布し栴檀の水を撒布したるものなり。その左右両側に蓮池等が作られてあり、それ等の蓮池は即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の縁を以て建てられてあり。

[87b1] その蓮池の四方に階〔道〕が作られてあり、それ等の階〔道〕も又、即ち金所造と銀所造と瑠璃所造と水晶所造との四種の縁を以て建てられてあり。その蓮池の四方は又、欄干によりて普く遶らされ、形容は善く楽見するところにして端厳なり。

[87b3] 水は清涼にして、水は蜜の如く、溢満し、憂鉢羅華と蓮華と黄蓮華と白蓮華とによりて遍く覆はれ、水より生じたる鳥の群れが、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。

[87b5] それ等の蓮池の近辺にはあらゆる種類の花樹と果樹とありて善く育ち、妙形にして遍く成ずること花鬘を作りたるが如し。恰も熟練したる花鬘師と花鬘師の弟子によりて花鬘（karṇika）を紐に通して花の耳飾を善く作りたるが如きなり。

[87b6] 草原に生じたる鳥の群は、美妙音と意楽音と柔軟音と、随欲転の有色の妙音を発するなり。それ等の近辺には青、黄、赤、白の四種の如意樹あり、青、黄、赤、白の四種の美服あり、青、黄、赤、白の四種の如意樹所生の衣あり。諸々の手厳具と足厳具と不輝厳具とを生ずる四種の樹あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の掌中にやって来るなり。種々の楽器、即ち諸琵琶と笛と三弦琵琶と打鐶と、勢力あ

る手太鼓とを生ずる樹あり。諸天もしくは天女等が応に〔それらを〕欲する心を生ずるや否や、此の如きもの等は彼等の所にやって来るなり。

［88a3］甘露と蜜と蜜酒と漿の四種等も亦あり。諸高櫓と諸桜閣と諸家と諸美屋と諸涼房と諸看戯所と諸橋梁とは婦人の集まりによりて美飾され、無量の天女は依止して鑼と拍子木等を囃したて、種々の香を妙に塗り、搏食と漿とを持するもの等も亦あり。そこに於て大王持国は眷属と共に戯れ歓を尽し、自己の業の果を享受するなり。

南方増長天宮

［88a6］須弥山王の南方なる持双山王の頂上に「増長」（Virūḍhaka）と名づけられる増長大王の宮殿あり。長さ二百五十由旬、幅も二百五十由旬、全周は一千由旬ありて、形容は善く楽見するところにして端厳なり。金の墻壁を以て遍く遶らされ、墻壁の高さは半由旬あり。〔及至〕前の如く広説せられるなり。

西方広目天宮

［88b1］須弥山王の西方なる持双山王の頂上に「雑色」（Citrarūpa）と名づけられる広目（Virūpakṣa）大王の宮殿あり。長さ二百五十由旬、幅も二百五十由旬、全周は一千由旬ありて、形容は善く楽見するところにして端厳なり。〔及至〕前の如く普く説かるるなり。

北方毘沙門天宮

［88b2］須弥山王の北方なる持双山王の頂上に「具変髪」（Aṭakāvatī, Alakāvatī）と名づけられる毘沙門（Vaiśravaṇa）大王の宮殿あり。長さ二百五十由旬、幅も二百五十由旬、全周は一千由旬ありて、形容は善く楽見するところにして端厳なり。〔及至〕前の如く普く説かるるなり。

二七七

総　頌

［88b4］乾闥婆（Gandharbha）等の主なる王は東方を守護し、大王持国は持国城に居住するなり。瓶腹（Kumbhāṇḍa）等の主なる王は南

方を守護し、大王増長は増長城に居住するなり。諸龍の主なる王は西方を守護し、大王広目は聚色城に居住するなり。諸夜叉の主なる王は北方を守護し、大王毘沙門は柳葉隈城に居住するなり。

[88b7] 東方には持国、南方には増長、西方に広目、北方には毘沙門、此の四大王は世間を守護する威光を以て四方を守護するなり。神変大にして力もまた大なり。彼等は総じて三を守護せんが為に拡がるなり、〔即ち〕三十三の諸天と、安穏なる現見の諸仏と、また国土の主なる、かの転輪王を守護せんが為に拡がるなり。

13-3. 四州および八小州（Cf.『『倶舎論』世間品［山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明　世間品』法蔵館, 1955, p.376］）

四州

[89a2] 須弥山王の東方の大外海に、内には広く、外郭は半円形の如くになりたる「東勝身」と云はるる州あり。八万由旬下方なる金の大敷地に依止し、上面は水と平行するなり。

[89a3] 東勝身州の内側の長きものは二千由旬あり、内側の短きものは三百五十由旬あり、全周は六千三百五十由旬あり。形容は善く楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜられ、そこにて東勝身の諸人は、小城と城と大城と国土と王宮の周圍に居住するなり。

[89a5] 須弥山王の南方の大外海に、内には広く、外郭は美妙な車形（śakaṭākṛti）になりたる「贍部州」と云はるる州あり。八万由旬下方なる金の大敷地に依止し、上面は水と平行するなり。

[89a7] 贍部州の内側の長きものは二千由旬あり、内側の短きものは三由旬半あり。全周は六千三由旬半あり。形容は善く楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜられ、そこにて贍部州の諸人は、小城と城と大城と国土と王宮の周圍に居住するなり。

[89b1] 須弥山王の西方の大外海に、内には広く、外郭は円満（maṇḍala）になりたる「西牛貨州」と云はるる州あり。八万由旬下方な

る金の大敷地に依止し、上面は水と平行するなり。

[89b2] 西牛貨州の広さは二千五百由旬、全周は七千五百由旬あり。形容は善く楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜられ、そこにて西牛貨の諸人は、小城と城と大城と国土と王宮の周圍に居住するなり。

[89b4] 須弥山王の北方の大外海に、内には広く、外郭は四方形なる「倶盧州」と云はるる州あり。八万由旬下方なる金の大敷地に依止し、上面は水と平行するなり。

[89b5] 北倶盧州の長さは二千由旬、幅も亦二千由旬、全周は八千由旬あり。形容は善く楽見するところにして端厳なり。土壌を以て成ぜられ、そこにて北倶盧の諸人は〔小城と城と大城と国土と王宮の周圍に居住する〕なり。

八小州

[89b6] 八小州あり、即ち提訶（Deha）と毘提訶（Videha）と遮末羅（Cāmara）と筏羅遮末羅（Avaracāmara）と舎摭（Śāṭhā）と欝多羅慢怛里（Uttaramantriṇa）と矩拉婆（Kuru）と憍拉婆（Kaurava）となり。此等の八州の中、七には諸人が居住し、一には諸非人が居住するなり。

13-4. 諸世界の階層構造

諸天における智見の分際（Cf.『大毘婆沙論』巻 150〔*T* .27, 765c〕）

[89b8] 四大王の諸天は下〔地の諸有情〕を智見すると雖も、上〔地の諸天〕を〔智見すること〕なし。〔但し〕他の神変道の威力〔による〕を除く。

[89b8] 此の如く、諸三十三〔天〕と諸夜摩〔天〕と諸兜卒〔天〕と諸化楽〔天〕と諸他化自在〔天〕と諸梵衆〔天〕と諸梵輔〔天〕と諸大梵〔天〕と諸少光〔天〕と諸無量光〔天〕と諸極光浄〔天〕と諸少浄〔天〕と諸無量浄〔天〕と諸遍浄〔天〕と諸無雲〔天〕と諸福

生〔天〕と諸広果〔天〕と諸無煩〔天〕と諸無熱〔天〕と諸善現〔天〕と諸善見〔天〕もまた、下〔地の諸有情〕を智見すると雖も、上〔地の諸天〕を〔智見すること〕なし。〔但し〕他の神変道の威力〔による〕を除く。

［90a4］色究竟〔天〕の諸天は一切を智見するなり。

八大地獄

［90a5］無間（Avīcī）大地獄の底面は此より下方へ四万由旬入るなり。無間大地獄の上面は此より下方二万由旬に至るなり。その上部に大熱（Pratāpana）大地獄あり。その上部に炎熱（Tapana）大地獄あり。その上部に大叫（Mahāraurava）大地獄あり。その上部に叫喚（Raurava）大地獄あり。その上部に衆合（Saṃghāta）大地獄あり。その上部に黒縄（Kālasūtra）大地獄あり。その上部に等活（Saṃjīva）大地獄あり。此等八大地獄は上下に連続して住し、十六の増（utsada）を伴へり。

欲界（Cf.『大毘婆沙論』巻 75［*T*.27, 390a］：旧訳巻 40［*T*.28, 292a］）

［90a8］此より四万由旬の上に四大王の諸天あり。四大王の諸天の上面よりして最上面の量程に三十三の諸天あり。……同様に広説せられ……〔無熱の諸天より〕最上面の量程に善現の諸天あり。善現天の上部より最上面の量程に善見の諸天あり。善見の諸天の上部より最上面の量程に色究竟の諸天あり。

八種の雲

［90b4］雲には八種あり。雲の中の最厚なるもの、高さに於ては一由旬半なり。第二は一由旬と四分の一由旬なり。第三は一由旬なり。第四は四分の三（一由旬より四分の一少なきもの）なり。第五は半由旬なり。第六は一俱盧舎なり。第七は半俱盧舎なり。第八は四分の一俱盧舎なり。

[90b5] 世間施設中　第十三章なり。

（世間施設第十三章了、第八巻は続く）